

# 南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第15号 2022年11月1日

## 目次

### 巻頭言

南山国際高等学校・中学校の聖ヨセフ・フライナーデメッツ像と受け継がれる思い  
.....ウィニバルドス ステファヌス メレ.....2

南山大学図書館「ヴェルナー教授旧蔵コレクション」断想.....岡地 稔.....4

ジョー・オダネル氏ご来校～『焼き場に立つ少年』の撮影者～.....熊川 重也.....7

### 南山発見

南山大学附属小学校の図書室.....柴田 里香.....9

### 回想の中の南山

聖霊は宝石箱.....小池 洋子.....11



これまでに南山学園内で発行された年史の一部

## 南山国際高等学校・中学校の

# 聖ヨセフ・フライナーデメッツ像と受け継がれる思い

ウィニバルドス ステファヌス メレ

2023年3月末に南山国際高等学校・中学校が閉校となる。閉校式の準備にあたって、2022年6月15日に南山学園常務理事と事務局とで学校に訪問し、執行部との懇談会を行った。懇談会の前に、校地の境界エリアの説明など、校舎の重要な部分を案内していただいた。

その中で個人的に特に気になった場所の一つが、聖ヨセフ・フライナーデメッツチャペルである。その中には、チャペルらしい風景が広がり、正面中央に置いてある祭壇とその上のろうそく、その左側にある朗読台、祭壇の後ろ壁に掛かっている十字架、右と左の壁に掛かっている14留の十字架の道行の絵、祭壇の左前隅に置いてあるこのチャペルの守護の聖人の像などがある。当然のことだが、学校の閉校後には、このチャペルの建物は取り壊され、その中にあるそれらのものは様々な場所へ散らばり、いくつかは捨てられ、その残りは他の場所に運搬されることになってしまうだろう。

そのチャペルの思い出を残すために、私はそれらの写真撮った。このようなものは、ほとんどのチャペルで共通の特徴を表す一般的なアイテムになっているため、後でその写真だけを見ても、チャペル自体の存在をすぐには思い出せないかもしれない。特に各写真の説明が付いていない場合には、なおさらである。

しかし、このチャペルを訪れたり祈ったりしたことがある人にとって、このチャペルの存在の記憶を呼び起こすことができると考えられるものの一つは、聖ヨセフ・フライナーデメッツの像である。この聖人は、神言会会員の間では広く知られている聖人でありながら、南山学園の学校や日本のカトリック教会で聖ヨセフ・フライナーデメッツを守護の聖人とする建物は、南山国際高等学校・中学校以外ではまだ少ないからである。その他、チャペル内

の他のものと比較すると、聖ヨセフ・フライナーデメッツ像はかなり大きく、目立つ位置に配置されているため、チャペルに入るすべての人がすぐに目を留め、注目を集めることができるからである。

このようにして、この像は、見た人の記憶の中で、南山国際高等学校・中学校にある聖ヨセフ・フライナーデメッツチャペルの存在の特徴を形成していると考えられる。たとえこの像が他の場所に移動されても、南山国際高等学校・中学校のチャペルでそれを見たことがある人にとって、それを後で再び見る時に聖ヨセフ・フライナーデメッツチャペル自体の風景だけではなく、この学校の全体的な風景も思い出させることになるだろう。

このような思いが浮かび、南山国際高等学校・中学校のチャペルへの訪問にあたり、聖ヨセフ・フライナーデメッツ像の運搬先の可能性を聞かれた時に、個人的には南山学園の関係者が頻繁に訪れる可能性のある名古屋の神言神学院に運搬しても良いのではないかと答えた。勿論、この巻頭言を書いている時点では、これはまだ決定されたわけではない。ただ、運搬先はどちらにせよ、自分を含め、南山国際高等学校・中学校のチャペルでこの像を見たことがある多くの南山学園の関係者が再びこの像を見る時に、そのチャペルだけでなく学校全体の思い出をより多くの人々に語り継げることができるようになればと思っている。

同じメッセージは、実は「Nexus～受け継がれる思い～」をテーマにした2017年の南山国際高等学校・中学校の文化祭（南国祭）の基本精神となっていた。「Nexus」という単語には「繋がり」「連鎖」という意味が含まれているので、南国祭を通じて「クラスや学年を問わず生徒、そして歴代の卒業生とも「南山生」として硬い絆で結ばれてい

ることを実感」する、と南国祭実行委員長と副委員長（南国祭 2017、p.18）が指摘したように、残された聖ヨセフ・フライナーデメッツ像から湧き上がった南山国際高等学校・中学校の思い出を通じて、本校の卒業生の間だけでなく、学園全体および一般社会の多くの人々との繋がりも強化されるよう願う。まさにこれこそがアーカイブズの目的である。トーマス・リチャーズが *The Imperial Archive: Knowledge and the Fantasy of Empire* (2019) に指摘したように、「アーカイブズ」は「包括的な知識のユートピア的な空間…建物でもなく、テキストのコレクションでもなく、既知または認識可能なすべてのものの集合的に想像された接合点」なのである (p. 73)。そうであるならば「受け継がれる思い」もアーカイブズにおける重要な要素の一つであると言えるのではないだろうか。

(南山大学社会倫理研究所・准教授)



## 南山アーカイブズからのご案内

南山アーカイブズでは、学園に関する史資料の移管、収集、調査、整理、保管、公開および活用等を行っており、南山学園の歩みを概観する常設展示室と南山学園の歴史について様々な視点からの展示を行う企画展示室を設置しています。

\*開館時間：月～金（土・日・祝・南山学園の事務休業日を除く）午前 10 時～午後 4 時

\*入館料：無料

\*予約：不要

※史資料の閲覧、および複写については数日を要する場合がございます。

詳しくはお問い合わせください。

\*展示クイズ・スタンプラリーコーナーもあります。

参加者には記念品の配付も行っておりますので、ぜひご参加ください。ご来館をお待ちしております。

## 第 5 回 南山アーカイブズ企画展「回想の南山大学瀬戸キャンパス」

開催期間：2022 年 10 月 3 日（月）～ 2023 年 7 月 31 日（月）

開館時間：月～金（土・日・祝・南山学園の事務休業日を除く）午前 10 時～午後 4 時

会場：学校法人南山学園 南山アーカイブズ企画展示室（ライネルス館 3 階）

備考：予約不要・入場無料（一般の方もご観覧いただけます）

第 5 回企画展



QRコード



## 南山大学図書館

### 「ヴェルナー教授旧蔵コレクション」断想

岡地 稔

現在南山大学では創立75周年事業の一環として「ライネルス中央図書館構想」のもと、図書館のリニューアル工事が行われています。「知」の拠点としての大学図書館の一層の充実と発展が期待されるところです。ところで図書館の「蔵書」といいますと、最近ではデジタル化され、パソコン上で比較的容易に閲覧できますが、それでも実物としての「書物」はそれなりの重みを感じられて、やはり捨てがたいところです。本稿では南山大学の所蔵するある実物のコレクションについて、少し記したいと思います。



Karl Ferdinand Werner, 21 février 1924–9 décembre 2008

Peter Schöttler, Karl Ferdinand Werner, historien du temps présent, *Francia, Forschungen zur westeuropäischen Geschichte*, Bd. 38, 2011, pp.179-189, photo at p.185  
より

日本の大学図書館には、ヨーロッパの著名な中世史研究者の旧蔵書がまとまって所蔵されているものが、2点あります。明治大学図書館の所蔵するカール・ボーズル（1908-99）の旧蔵書「ボーズル文庫」、そして南山大学図書館所蔵のカール・フェルディナント・ヴェルナー（1924-2008）の「ヴェルナー教授旧蔵コレクション」です。本学のこのコレクションについては、図書館HPに簡単な紹介があり（南山大学図書館HP→図書館について→所蔵資料紹介→ヴェルナー教授旧蔵コレクション）、また図書館報デュナミス46（2004）に拙文が載っていますので、ご参照ください。またキリスト教学科の井上淳先生の「2017年9月の雑記」（[https://www.ic.nanzan-u.ac.jp/~jino/homepage/zakki\\_9\\_2017.htm](https://www.ic.nanzan-u.ac.jp/~jino/homepage/zakki_9_2017.htm)）がこのコレクションのことを面白く興味深く紹介しておられます。記したいというのはこのコレクションが南山大学図書館へ来たいきさつです。

20年ほど前のこと。私の研究室に洋書専門の雄松堂書店（現丸善雄松堂）関西支店のAさんが訪ねてきました。半年に一度ほど、お会いする仲なのですが、聞けば東京本社に出張し、その帰りだといひます。本社でたまたま見たカタログの中に、届いたばかりのヨーロッパ中世史関係の売り立ての案内があり、私の顔を思い浮かべ、参考までにお届けしようと思い、名古屋に立ち寄りました、とのこと。K・F・ヴェルナー教授って、ご存じですか？

驚愕！ ご存じも何も、ヨーロッパ中世史の大家。しかも現役の。それなのに売り立て？ 疑問に思いつつも、カタログを見ると確かにあのヴェルナー教授の蔵書に間違いなさそう。二、三千冊だという。ほ・し・い。私の反応を見てAさんも安堵。もっと大部で、詳細なカタログがあるそうなので、改めて手に入れます（実際、カタログと



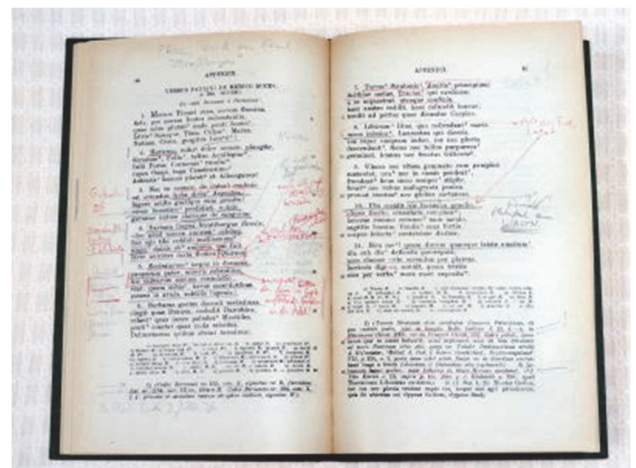
いうより、厚さが5cmほどもある、大判の書籍ともいうべきものでした)、と彼。でも、金額が… 文科省の私大への研究設備整備費の助成金を獲得すれば、何とかかなると思いますよ、と彼。でも、この金額では… 確かに高額ですが、頑張りましょう、と彼。

ということで、私とAさん、出勤。私のほうは学内の承認手続き。仮に助成金が得られるとしても、大学のほうも相当な金額を要する。図書館の方々、大学の関係部署の方々にお会いし、話し、お願いする。また学内申請のために共同申請者を求め、関連分野の先生方をお願いにあがる。しかしこの間、私の中では別の不安が。雄松堂さんはこの件の独占エージェントではない。この売り立てのことを国内外の他の研究者・機関が知ったら、ヴェルナー教授のネームバリューからして…、と。雄松堂さんが彼の地の代理店と仮契約でも何でもして、早く押さえてほしいと願うばかり。手に入らないとなったら、学内で進めている手続き自体無意味になり、結果的に多くの方に迷惑をかけただけになってしまう。しかし雄松堂さんにしても、南山大学が購入決定しないうちは、動きづらいのでは…

こうした中、ついに学内で2003年度文科省私大研究設備整備費補助金の申請案件となり、そのタイミングで雄松堂さんも本格的に動き出します。実は雄松堂さん、彼の地の代理店と仮契約をしていち早くこの案件の販売権を確保してしまっていて、南山大学が購入しない場合はしょうがない、別の大学・機関に売り込もう、と腹をくくっていたのです。ところが、蓋を開けるとびっくり。直後にドイツの2つの大学からすぐにでも購入したいとの申し出。しかし南山大学との信義を優先して、断った次第。私はあとからこのことを聞き、以下に記すこともあり、恐縮するばかり。まだ南山大学は文科省に申請したばかり。経験則からして補助金獲得は多分大丈夫とはいえ、最終決定ではありません。恐ろしいことにこの年(年度末)国会が紛糾して、新年度予算の承認が年度を越えてしまう事態に。雄松堂さんは事態を重く受けとめ、副社長がじきじきに南山大学を訪れ、予定されていた期日までに支払いが見込めないときには、南山大学が全額を用意してくれないか、打診。南山大学の返事是否！ 私は、雄松堂さんに対しても、南山大学に対しても、身の置き所がありません。

じりじりして待つ間の長いこと！ 幸いにもその後はすべてがうまく運び、いよいよすべてが南山大学図書館

にもち込まれたときの喜びはひとしお。図書館の方々は今からが大変。分類し、データ入力し、ラベル張りし、配架…？ ここで私と図書館との間で思い違いが生じます。私としては本コレクションを、明大の「ボーズル文庫」のように独立した「文庫」として特別な分類をし、一カ所に配置してほしい、と思ったのですが、本学図書館では、専用の配架箇所を確保することが難しいため、通常の書籍と同じ扱いにし、分類番号に沿って、そのまま現在配架されている書籍の間に挿架する方針でした。それではコレクションとしての意味がない、と私は再考、再再考を、と何度もお願い。図書館の方もよりよい方法を、と熟考を重ねてくれまして、最終的に配架は当初の予定どおりとするが、①個々の書籍のデータ上に[Collection of Prof. K. F. Werner]を書き加え、蔵書検索で[Collection of Prof. K. F. Werner]もしくは[Karl Ferdinand Werner]を入力するとコレクションの一覧を見られるようにする、②書籍本体に「K.F.Werner 教授コレクション」の印を押す、ということになりました。正直、納得いかない思いもあったのですが、一生懸命解決策を案出して下さった図書館の皆さんに感謝です。



ヴェルナー教授の書き込み(井上、前掲稿より)

ところで本コレクションの実物を手に取ってパラパラめくってもらいますと、鉛筆やボールペンの書き込みがいっぱいあることに驚かれると思います。書き込みしない主義(?)の私ははじめびっくりしましたが、これらはすべてヴェルナー教授の書き込みです。これらの書き込み自体、一種の「手稿」として、ヴェルナー教授の思考過程などを知る重要な資料となるはずで、この意味でも本

コレクションは、書籍の単なる集積では得られない独自の価値をもつといえます。実は、私、本コレクションの一冊を返却したい、図書館の係の方が本をばらばらとめくり、やにわに消しゴムを手に取り、書き込みを消そうとする場面に遭いました。図書館の方としては、本の返却時におこなう通常の行為なのですが、私は大慌てでやめてもらい、事情を話し、今後ぜひ留意していただくようお願いしました。幸いにも図書館内での連絡事項となって、その後はヴェルナー教授の書き込みが消されることはないようですが、図書館の方々には今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「ボーズル文庫」の場合、売り立ては、ボーズル教授が亡くなった後、ご遺族の意向によりなされたと聞きます。本学のコレクションの場合、おそらくはヴェルナー教授の引退にともない、売り立てに出されました。私は2004年の旧稿で「引退とともに自分の研究を支えてきた文献をすべて借しげもなく手放すこと、それは研究者にとっていろいろな意味で大いなる決断であったと思われませんが、ヴェルナー教授がそう決断した理由は定かではありません」と書きましたが、ヴェルナー教授は4年後の2008年末、長年活躍したパリからは遠く離れたドイツ南端、アルプス北麓の湖畔の町テーゲルンゼーで亡くなります。穏やかな晩年であったであろうことを願わずにはられません。

(南山大学名誉教授)

## 史資料提供のお願い

南山学園に関するもので、南山アーカイブズへご提供いただけるものがありましたら、ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

- モノ：校章・バッジ・体操服・制服など
- 文書：教科書・教材・時間割など
- 写真：授業・学生生活・サークル活動など

在学・在職時にはありふれていたものが、学園史を知るための貴重な史資料となることは少なくありません。

史資料の取り扱いについては、個人情報が含まれている史資料は非公開にするなど、十分注意しております。

また、寄贈者による公開制限希望にも対応いたしますので、お申し出ください。

### < 連絡先 >

学校法人南山学園 南山アーカイブズ  
TEL: 052-861-0613/FAX: 052-861-0614  
E-mail: nanzan-archives@nanzan.ac.jp

南山アーカイブズ



QRコード

## ジョー・オダネル氏ご来校 ～『焼き場に立つ少年』の撮影者～

熊川 重也

2019年秋、フランシスコ現教皇来日。そのときに話題になったのが、『焼き場に立つ少年』の写真だった。そのいきさつは紙面の関係で割愛するが、実はその15年ほど前に高校生有志によって、写真『焼き場に立つ少年』は、その撮影者とともにも名古屋を訪れている。



「焼き場に立つ少年」1945年、ジョー・オダネル氏撮影

2005年8月上旬、大戦後の今も『焼き場に立つ少年』を探すジョー・オダネル氏の番組「原爆の夏 遠い日の少年～元米軍カメラマンが心奪われた一瞬の出会い～」が放映された。その翌日だったと思うが、学校で補習授業が行なわれていた。ムツとする熱気が漂う学校の廊下で生徒たちと立ち話しをしているとき、この番組の話になった。そこからエスカレートして『焼き場に立つ少年』の写真を借りて、文化祭で展示しよう。マスコミに載ると、その子の手がかりになることが出てくるかもしれない」「それから、オダネルさんに来てもらおうと、メディアが注

目する。そして僕たちに講演をしていただこう」。これが始まりだった。

実は、立ち話をした生徒のなかにこんな経験をした子がいた。「この夏、豪に短期留学したんだけど、ホームステイ先で8月15日に日本の全国戦没者追悼記念式典のニュースが流れたんです。原爆投下はやむを得なかった、という現地の人たちの反応を見て、日本人の自分はショックを受けた。核兵器の惨状が抜け落ちているんです」と心のモヤモヤ感を持っていた。しかし、「米国人である原爆投下後の原子野を歩き、もっとも弱い人間に寄り添おうとしている人がいるんだ」と心が踊ったという。

計画の始まりが8月上旬、写真展開催が翌9月下旬。この計画は、「無理というより無謀」だった。まずは、学校側の了解を求めた。話しを聞いて励ましてくれた。

とにかく諦めずに始めた。至急、計画骨子を練り、要点を押さえた文書をこしらえ、とりあえず東京の番組のディレクターにFAXを送信した。ややあつて電話があった。番組の製作に関係したかたは、だれでもそうだと思うが、自分の番組に対して視聴者からの反応があると、これは大変嬉しいようだ。しかも今回、高校の1年生から『焼き場に立つ少年』捜索に協力したいという、いうなれば次の世代を担う生徒たちからの申し出に、ディレクターは大変感激し、嬉しく思ってくださいました。それだけでなく「米国から招待し講演をお願いしたい」という、いい意味で無謀な生徒のチャレンジに「難しいと思いますが、一度米国のご自宅と連絡をとってみます」と応じてくれた。ディレクターを通して南山からの申し出を聞いたオダネルさんの奥さんは「写真展を。いつですか？エーッ！来月の下旬にですか。これは一度考えさせてください」と話したそう。というのも、番組に出てくる写真パネルをそっくりそのままお借りできるものと私たちは考えていたが、パネルは展示会場に恒久的にはめ込まれた（あるいは壁



に固定された) 展示だったのだ。日本に送るとなると、もういちど新しくネガから焼き増して写真を作成し、パネルを取り付ける作業を奥さんが一人でこなさなければならない。また、公に展示すると、写真のコメントの英文は正確な日本語にする必要がある。米国文化情報局の元専従カメラマンがつけた英文なのだから、生徒や英語の先生に安易に翻訳を頼むわけにいかない。翻訳会社に頼めば相当な予算が必要になる。しかし、これは意外なことから解決をみた。なんと奥さんは日本出身だった。これは幸運だった。

ディレクターから電話があって、「かなりのご高齢ですから、いろいろ制約があります」ということだった。多少条件があったが、ディレクターからオダネルさんの連絡先を教えてもらい、直接先方と連絡をとることができた。そして、来日が実現できるところまで話が進んだ。

来日の日の9月19日月曜日は、祭日だった。学校が休みだったので有志の生徒たちと昼頃、名古屋金山駅改札口に集合し、中部国際空港に向かった。シカゴからの直行便だったが、定刻より少し遅れて到着。私たちは、すぐに雑踏のなかにジョー・オダネルさんを見つけた。

そのあと、奥さんとともにジャンボタクシーで名古屋市内のホテルに向かった。奥さんにとって日本語は母国語なので、細かい打ち合わせなど、私たちとオダネルさんの会話には不自由はなかった。5人の大統領に仕えてきたジョー・オダネルさん、言わば「歴史の証人であり目撃者」が、いまそばにすることが何か不思議な感じがした。



高校生に講演 (2005年9月21日 カトリック南山教会)

高校生に講演を行なった。その中でオダネル氏は原爆投下直後の長崎の街と庶民の惨状、特に『焼き場に立つ少年』の出会いを語った。日本の教科書には、「原爆投下を決定したのはトルーマン大統領」とある。しかし、投下に関わる同大統領の歴史的な秘話、また「トップの人たちの

孤独で深い苦悩」など、教科書にないものを学んだ。

ご高齢の同氏のために、講演場所として空調設備が整った南山教会の聖堂を同教会の厚意でお借りできたことを紙面を借りて謝意を申し上げたい。

9月24～25日の文化祭の写真展には多くのかたにご来場いただき、同氏との交流も生まれた。ユーモアを解する高潔な人格者だという印象をもった。



講演後、オダネル氏と贈呈された写真を囲む有志の会のメンバー。後列右端、通訳担当の奥さん。

帰国するオダネル氏を見送るために空港に向かうタクシーのなかで、私たちはいちばん嬉しいことばをいただくことになった。オダネル氏が奥さんにこうつぶやいた。それを奥さんが同乗しているみんなに大きな声で知らせた。「もう日本に来ることもないだろうが、いままでの招待のなかでいちばん良かった」と。私はそのとき、これまでのことを振り返っていた。生徒たちはチャレンジを諦めず、一生懸命やってきて報われたと。

オダネル氏は、その2年後の2007年8月9日逝去された。奇しくも長崎原爆投下の日だった。



講演会時のジョー・オダネル氏

(南山高等学校・中学校男子部宗教科元教諭 有志の会顧問)

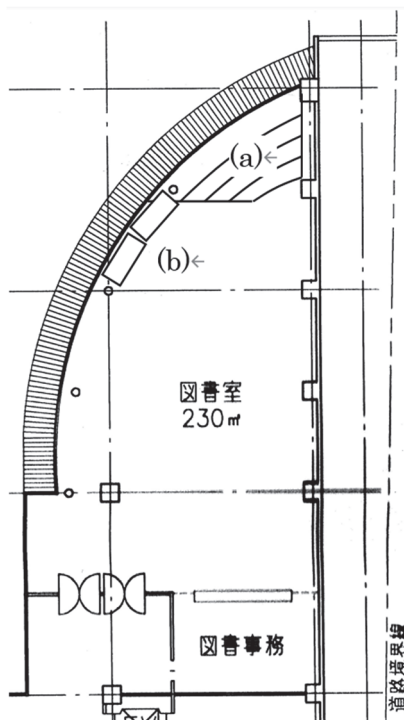
◆参考文献：『トランクの中の日本』(小学館)

## 南山大学附属小学校の図書室

柴田 里香

本校は、2008年に開校しました。そして、私は開校に先駆け、着任が決まっている状態でした。そんな中、私は司書教諭の資格を持っていたためか、当時採用を担当して下さっていた小久保先生から「南山小学校の図書室についての案を出してください。」という話を頂きました。新しい図書室の構想に加えさせていただくことが嬉しくて、どのような図書室が南山小学校にふさわしいのか考え、いくつかの提案をしました。それが、2006年末です。

当時の案には2つの提案があります。1つ目が「どの子ども『本好き』になる図書室を目指して」として、図書室のスペースの提案をしています。



### (a) 階段状のスペース

1クラス分(30名)は座れるスペース。後ろへいくほど、段差が高くなる。

### (b) 畳敷きのスペース

2~3畳分ほどのスペース。扇状の畳を作り、それを床に埋め込む。

当時の提案を原文のまま載せます。

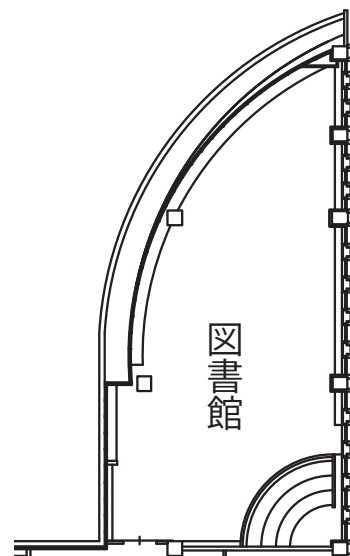
### (階段状のスペース)

部屋のカーブを生かした段差を何段か作る。そこは、椅子代わりになり、めいめいが気に入った本をそこで読むスペースとなる。(近くに低学年向きの書架を置く。)時には、そこは階段教室のようなスペースとなり、読み聞かせの会場となる。また、図書室での授業のときにも利用できる。

### (畳敷きのスペース)

図書室のカーブに沿って、一部を畳敷きとする。そこへは、上靴を脱いで上がるが、その分落ち着いて本を読むことができる。時には、寝転がって本を読んでいる子もいるだろうが、そのぐらいリラックスできる場所として活用したい。

これを現在の図書室と比較してみると、随分提案が採用されたことがわかります。



現在の図書室



(階段状のスペース)として提案していたものは、提案の場所とは異なっていますが、現在の「おとぎの部屋」として、図書室事務近く(図右下)に階段状の部屋があり、実際にコロナ前は、図書の授業などで読み聞かせの場所として使われていました。読み聞かせの団体において、図書の授業やアフタースクールの講座前の時間にも利用し、たくさん子どもたちが親しむ場所となりました。委員会の活動として、高学年児童が低学年の子に読み聞かせをしていたこともあります。



おとぎの部屋

また、(畳敷きのスペース)は、図書室の中央部分にカラフルなマットとして生まれ変わり、設置されました。このマットは、椅子代わりに腰掛けたり、上靴を脱いで上がって本を読んだりする場所ですが、子どもたちが寝転がって本を読んでいる姿を見かけることもありました。提案通り、確かにリラックスできる場所として使われていました。



以前のマットスペース

ただ、現在はコロナ禍ということで、残念ながらマットは、ほんの一部だけになっています。コロナが収まり、

おとぎの部屋やマットが以前のように使われ、子どもたちが楽しめる場所としての図書室が戻ってくることを待ち望んでいます。



現在のマットスペース

2つ目の提案が、「よく利用される図書室を目指して」として「大きめの机の配置」「公共図書室との連携」「資料コーナーを作る」「学習用パソコン及び大型プラズマテレビの設置」などを提案しています。提案通りになっていないことももちろんありますが、学習用パソコンや大型プラズマテレビの設置などは、現在違った形で利用されています。授業の資料としての本も随分整い、必要な時に必要な量だけ借りられるようになっており、その意味でもよく利用される図書室になっています。

コロナ以前は、読み聞かせ活動も2つの団体をお願いしていましたが、コロナ禍になり、中止になっていました。現在少しずつ元に戻り、今年度は、低学年の「おはなし会」を行うことができました。子どもたちは、この時間をとても楽しみにしています。特にこの「おはなし会」は、本を読んでもらうのではなく、団体の方が内容を覚えて声だけでお話をするものです。挿絵を見ることがないので、頭の中で自由に場面の様子を想像しながら聞くことができます。物語に浸ることができるこの時間は、自分が読むときはまた違った楽しさがあるようです。

本校は、読書好きな児童が多いです。毎日の朝の読書の時間はもちろん、ほんの少しのすき間時間にも「本を読んでもいいよ。」という、喜んで読む姿が見られます。今後も、子どもたちが、いそいそと通ってくる図書室としてさらに発展してくれることを願っています。

(南山大学附属小学校教頭)



## 回想の中の南山

## 聖霊は宝石箱

小池 洋子

私が聖霊と最初に出会ったのは、小学校低学年のときでした。当時の私は、愛知県体育館で水泳を習うために、週3回ほど守山区から市バスを利用して『市役所』まで通っていました。その時間は中高生の帰宅時間帯にあっていたため、沿線の中高生が目的地の少し手前で大勢乗り込んできて、車内はたいへん混雑しました。私は降車時に、いつもみくちやにされながらバスを降りなければなりません。『市役所』の停留所では、赤と茶色のベレー帽を被った中高生の集団が市バスを待ちかまえています。既にかなり混雑しているバスに乗り込もうとするベレー帽のお姉さんたちは、必死の思いでバスを降りてくる小学生の私を見つけると、誰彼となく「小学生が降りてくるから」と声をかけあい、いつも道を空けてくれるのでした。

あれから50年以上の歳月が流れました。その間、私はベレー帽の学校に入学し、大学卒業後は教員として40年間、勤めることになりました。聖霊で多くの先生方や友人、生徒たちと出会い、様々な経験を重ね、人生の大半を過ごすことになったのです。

私は、聖霊が三の丸から瀬戸に移転して、3年目の入学生でした。当時の聖霊は、理事長様であるSr.トマ、学園長様のSr.エリザベト、校長様のSr.パウラが、登下校時や休み時間、お掃除の時間、授業中なども校内をよく回られており、学校生活には慣れたか、困っていることはないかなど、私たち生徒に優しく声をかけてくださいました。また、学校では宗教の授業だけではなく、一般教科を担当する教員や、事務や図書館の職員としても何名もの聖霊会のシスター方が活躍されていました。小学生の私が聖霊生に抱いた印象のままの、温かな雰囲気のある学校でした。「光の子として生活しなさい」という教えの下、一人ひとりが大切にされているという実感とともに、多感な6年間を緑豊かな環境の中で過ごすことができました。



移転当時のキャンパスの様子

一方で、当時の聖霊は瀬戸に移転したことで名古屋市内からの通学が不便となり、生徒数が減少していました。実際、私の入学時は中1から中3までの中学全学年が1クラスという状態でした。その後、高校からの入学者は募集活動の努力もあって徐々に増えたものの、80年代に入る頃までは、中学の各学年は1クラスまたは2クラスという状況が続き、相変わらず名古屋からは遠い学校でした。

私は大学を卒業し、幸いにも母校に奉職することとなりました。その頃の聖霊は大野寛二神父様が学校長となり、前述のような状況を打開するために、中学5クラス高校6クラスの体制をとる構想が打ち出され、教職員一丸となって中学受験者の増加を目指す募集活動が行われ、学園バスも整備されました。また、より魅力的な学校にするために、新たな教育活動も次々と展開され、聖霊の評価も次第に高まってきました。現在では聖霊の伝統とも言える中学卒業論文、リーダー合宿、EVE, My青春!、海外研修なども、この時期に創設されたものです。生徒はこの様な活動を軸にして、人との関わりを学び、自ら考え、視野を広げていきます。社会とつながり、奉仕活動などを通して、さらに思いやりの気持ちを育み、聖霊生「光の子」となっていくのです。



### 第30回 (2011) EVE, My 青春!

この文のタイトルである「聖霊は宝石箱」は、南山学園との合併が公表されたときの山本智子さんという生徒の言葉です。彼女は元生徒会長として、卒業時に後輩へ次のようなメッセージを残しました。——私たちは、色も形も大きさも違う宝石です。聖霊という宝石箱の中で、さらに磨かれ、お互いにその輝きを受けて、より美しく光ることができるのです。どうかこの宝石箱である聖霊を、あなた達が大切に守って行って下さい。——当時は、マスコミ各社が、日本初の学校法人合併を大きく取り上げ、その中で吸収合併という言葉が使われたために、通学時に他校生から心無いからかいを受け、泣きながら登校してくる生徒もいました。在校生や一般の教職員に、合併後の聖霊がどの様に変化するのか、全貌が明らかにされないままに大きく報道されたために、様々な憶測が生徒や保護者の間で飛び交い、不安が大きく広がりました。生徒会の要望で開かれた在校生に向けての説明会では、学校名だけではなく学園バスの表記に至るまで聖霊を残してほしい、制服を変えないほしい、行事のあり方を変えないほしいなどと様々な思いや要望が、多くの生徒から特に高3生から、口々に出ました。私たち教員が想像している以上に、生徒たちが聖霊での学校生活に満足し、聖霊生であることを誇りに感じ、聖霊を大切に思っていることが伝わってきました。生徒たちも誰かが発言する度に、自分と同じ思いを抱いていることを確認しているかのようでした。聖霊はかけがえのない宝石箱だから大切に守ってほしいとの山本智子さんのメッセージは、この説明会から程ないときに卒業生を代表して発せられたものです。

混乱はありましたが、合併という出来事によって、私たちが、今まで聖霊で大切に受け継がれてきたもの、そして聖霊の素晴らしさを再確認できたことも事実です。合併直後の時期に、Sr.トマが、ご高齢にもかかわらず学校長

に就任して下さったことで、これからも“聖霊らしさ”が大切にされるということが実感できました。生徒と教職員に安心感が広がり、様々な不安も解消されていきました。その後も、時代に合わせての必要な変化はありましたが、“聖霊らしさ”は守られ、生き続けています。現在の生徒は、三の丸時代や、瀬戸移転当初の困難な時期、合併時の様々な出来事を知る由もありません。しかし、確実に「光の子」の精神は受け継がれているのです。

私が昨年度末で退職をしたこともあり、色々な年代の卒業生が、よく連絡をしてくれます。彼女たちと話をしていると共通して感じるがあります。それは卒業して何年経っても、進んだ道は違っていても、互いに助け合い、強い絆で結ばれていることです。そして一人ひとりが、家庭や職場や地域などの周囲の人たちと共に幸福になるための努力を、惜しまないことです。今も「光の子」であり続けている彼女たちのことを誇らしく、とても嬉しく思います。この先、様々な苦労や困難に遭遇したとしても、きっと彼女たちは心の中の宝石箱をそっと開いて、聖霊での経験を思い出し、逞しく乗り越えていくことでしょう。聖霊生にとって、聖霊は互いを認めあい、学びあい、助けあい、励ましあって共に成長していくことができる場所、かけがえのない宝石箱なのです。

現在の私があるのは、全て聖霊のお蔭です。最後に、創立時より聖霊に関わって下さった全ての方々、そして私が聖霊で出会うことができた全ての方々に、心より深く感謝いたします。

(聖霊高等学校・中学校 元教諭)

南山アーカイブズニュース 第15号

Nanzan Archives News

発行日 2022年11月1日

編集・発行 南山アーカイブズ

名古屋市昭和区五軒家町6番地

印刷 常川印刷株式会社

名古屋市中区千代田二丁目18番17号